



### モンシロチョウ

【生息地】 平地、耕作地周辺  
【成虫出現期】 3月～11月  
明るく開けた場所に多く、白、黄、紫系の小さな花を好む。農耕とともに分布を広げてきたともいわれ、幼虫はアブラナ科の植物を食べる。



### サツマシジミ

【生息地】 山裾の林縁から平地  
【成虫出現期】 3月～11月  
かつては珍しい種であったが、分布を広げ今ではこの地方でもよく目にするようになった。表側の羽は明るい青色に白紋がある。



### ミカドアゲハ

【生息地】 オガタマノキ周辺の樹冠  
【成虫出現期】 5月、7月～8月  
熱帯系のチョウで、日本はその北限にあたる。紀伊半島南東部が東限で、中国地方の一部と四国、九州に見られるが、どの地でも産地は限られている。町内では烏止野神社で見られ、5月初旬に発生し、オガタマノキの周辺を活発に飛翔し、トベラの花をはじめ、各種の花によく集まり吸蜜する。裏の紋の色が地域により異なっており、この地域では赤いものやオレンジのものが多い。



### キナンウラナミアカシジミ (絶滅危惧種)

【生息地】 山裾の林縁から平地  
【成虫出現期】 6月～7月  
紀伊半島南部に生息するウラナミアカシジミの亜種で、ナンキウウラナミアカシジミとも呼ばれる。通常のウラナミアカシジミの幼虫はクヌギを食べるが、この亜種の幼虫はウバメガシを食べる。氷河期に北からきた個体がウバメガシを食べるようになったという説や、中国大陸のウバメガシを食べる個体がやってきてこの地域に残っているという説などがある。町内では浅里で確認されている。



### イシガケチョウ

【生息地】 山裾の林縁から平地  
【成虫出現期】 3月～11月  
南方系のチョウであるが、この地方では山間渓流に普通に見られる。翅が石垣のような模様になることから名づけられた。



### アサギマダラ

【生息地】 林縁部  
【成虫出現期】 4月～11月  
淡い青色の半透明の翅をもつやや大型の美しいチョウ。気流に乗って長距離移動し、この地方では10月から11月によく見られる。



### ナミアゲハ

【生息地】 山裾の林縁から平地  
【成虫出現期】 3月下旬～10月  
日本全土に分布し、日の当たる低木の繁みや明るい生垣に沿って一定のコースを飛ぶ習性がある。幼虫はミカン科の植物を食べる。



### ナガサキアゲハ

【生息地】 山裾の林縁から平地  
【成虫出現期】 4月～10月  
1990年代になって初めて三重県に分布を広げてきたチョウで今では普通種となっている。後翅に尾状突起がないのが特徴。



### シオカラトンボ

【生息地】 平地、水田など  
【成虫出現期】 4月～11月  
日本全土に生息し、平地や市街地などでもよく見られる。オスの胸や腹背面が白粉で覆われて塩をふいたように見えるのが名前の由来。



### コサナエ (絶滅危惧種)

【生息地】 池沼や湿地など  
【成虫出現期】 4月～6月  
体長約39mm～47mmの小型のサナエトンボで、北海道や東北地方では普通に見られる寒冷地のトンボ。井田で見られる。太平洋側などの南部には基本的に生息しておらず、この地域に生息しているのは生物学的にも希少なもので、三重県の絶滅危惧種に指定されている。かつて氷河時代にこの地域に来て、その後氷河時代が終わった後も絶滅せずに局所的に生き残っているものと考えられている。



### ウスバキトンボ

【生息地】 平地、水田など  
【成虫出現期】 4月～11月  
赤道付近に分布し、春、日本へ渡ってくる。この地方では7月～9月によく飛んでおり、精霊トンボや盆トンボなどとも呼ばれている。



### ベニトンボ

【生息地】 池、沼、河川の淀みなど  
【成虫出現期】 6月～11月  
南国系の種で、徐々に北へ分布が広がってきている。平成23年に紀宝町において本州で初めて、個体が捕獲された。



### ムカシトンボ (準絶滅危惧種)

【生息地】 溪流  
【成虫出現期】 4月～6月  
体長約50mm。「生きた化石」といわれ恐竜が栄えていたころの姿を今に留めているという。世界でも日本とヒマラヤ地方、中国の一部だけに生息する珍しい種類。休止姿勢で止まるときには、羽を完全にたたむ。幼虫は山間渓谷の流れの速いところで生活し、成虫になるまでは5～6年は要するといわれている。さらに羽化前の1か月ほどは、川岸の湿った落ち葉の下や石の下で過ごす。全国的にも個体数は減少している。紀宝町では4月から5月上旬に相野谷川支流の渓谷で見られることがある。

撮影：浅名正昌氏



### ハッチョウトンボ

【生息地】 湿地、休耕田など  
【成虫出現期】 5月～10月  
全長20mm程度と日本で一番小さなトンボ。鶴殿で見られたが、環境の変化を受けやすく、現在、紀宝町では姿を消している。

## 紀宝町に生息する チョウ・トンボたち

この東紀州地域はよく自然が豊かといわれていますが、その自然の豊さに比例して、多くの昆虫が生息しています。

今回は、この地域のチョウやトンボを何十年も研究されている成川地区の山口和洋さんに昆虫の生態や、昆虫採集をする際の注意点などをお聞きしました。

写真提供：山口和洋氏

### 多くの昆虫が生息する東紀州

紀伊半島の南部に位置するこの東紀州地域は、温暖多雨な気候と、豊かな自然が残っており、山地や平地、河川など至るところに多種多様な種類の昆虫が生息しています。

また、ミカドアゲハやベニトンボなどを始めとした南国系の昆虫はもちろんだが、寒冷地に生息するコサナエなども見つかっており、北の昆虫も南の昆虫も受け入れられる自然を有する地域だといえます。

また、昆虫は自然と密接に関わっており、種類や生態を調べることで、自然の状態を知ることができます。

### 虫は環境のパロメーター

チョウは植物と関係が深い昆虫で、例えばモンシロチョウの幼虫ならキャベツなどアブラナ科の植物と、種類によって食べるものが決まっており、他のものをあげても食べません。

そのため、チョウを探すなら、まずそのチョウの幼虫が食べる植物を探すこと

が近道です。逆に、この植物があるからこのチョウがいる可能性がある、という考え方もできます。

また、トンボは幼虫期を「ヤゴ」と呼ばれる姿で、水の中で生活していることから、水と関係が強い昆虫といえます。トンボの種類は、川や池沼などの幼虫期に生息する水辺の環境に左右され限定されるため、トンボの種類を調べることで、水環境を判断する目安となります。

### 自然環境の変化と昆虫

山口さんが調査をはじめだした45年ほど前と現在を比べると昆虫の種類は変わってきているようです。

人の手による環境の変化のほか、紀伊半島豪雨などの風水害や温暖化などの気象条件の変化により、新たに発見される昆虫もあれば、見つからなくなり絶滅したと考えられる昆虫もいます。普段何気ない景色のなかに紛れ込んでいる昆虫の姿に意識を向けることで、環境の変化を感じ取ることができるともいえます。